序

明星地域の特に丘陵部には数多くの古墳等埋蔵文化財を今日に残していますが、明星古墳群は平野部に存在するもので過去の破壊から免れた数少ない古墳群の１つであり規模は小さいが貴重なものであります。

この度、宅地造成により発掘調査が必要となり昭和48年７月15日から８月26日に至る間に発掘調査を実施しました。

調査に際しては、県教育委員会、皇学館大学考古学研究会、五十鈴商事株式会社及び地元の方々には格別のご協力とご配慮を賜わりました。

お陰をもちまして貴重な文化財の数々を明らかにすることができ、また、そのうち主な古墳の保存ができるようになり、実に喜ばしい限りです。

調査報告の発刊に際して、改めて関係者各位に深く感謝の意を捧げる次第です。

昭和50年３月１日

明和町教育委員会教育長

潮　谷　英　一

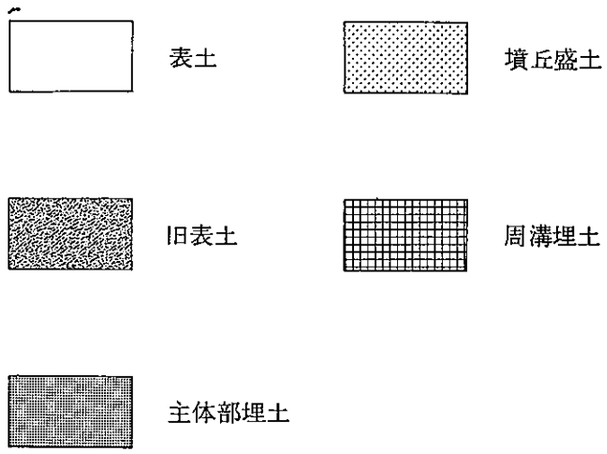
例　　言

1．本書は、五十鈴商事株式会社による団地造成に伴って、明和町教育委員会が昭和48年7～8月に行なった明星古墳群の調査結果をまとめたものである。

2．発掘作業を進めるに当っては、五十鈴商事株式会社はもとより、団地造成工事を請負った西川組の協力を得た。調査員の宿所の提供については明和町立明星小学校の協力を得ることが出来た。記して謝意を表する。

3．第3図は、昭和44年6～7月に三重大学教育学部学生であった吉村利男君(現三重県教育委員会文化課主事)が友人の協力を得て作製したもので、今回、本書に借用した。

4．本書の古墳断面図の層位凡例はつぎのとおりである。



目　　次

Ⅰ．前　　言……2
Ⅱ．位　　置……4
(1) 地　　形……4
(2) 歴史的環境……5
(3) 古墳群の分布……6
Ⅲ．調査の概況……11
(1) 明星1号墳……11
(2) 明星5号墳……16
(3) 明星6号墳……18
(4) 明星8号墳……21
(5) 明星9号墳……22
(6) 明星12号墳……25
(7) 古墳時代以前の遺物……26
Ⅳ 総　　括……28

挿図目次

第1図　明星古墳群位置図……4
第2図　古墳群の分布……7
第3図　古墳群測量図……9
第4図　発掘後の1号墳……10
第5図　1号墳断面図……11
第6図　1号墳主体部……12
第7図　1号墳出土遺物実測図……13
第8図　発掘後の古墳群……14
第9図　各古墳の断面……15
第10図　5号墳周溝遺物出土状況……16
第11図　5号墳出土遺物実測図……17
第12図　6号墳主体部……19
第13図　6号墳周溝遺物出土状況……19
第14図　6号墳出土遺物実測図……20
第15図　8号墳出土遺物実測図……22
第16図　9号墳主体部……23
第17図　9号墳出土遺物実測図……24
第18図　出土石器実測図……27

表　　明星古墳群調査概況表……29

図版目次

図版1　古墳群遠景
図版2　古墳群遠景
図版3　1号墳
図版4　1号墳遺物出土状況
図版5　5号墳
図版6　6号墳
図版7　6号墳遺物出土状況
図版8　8号墳
図版9　9号墳
図版10　9号墳の遺物出土状況と主体部
図版11　3号墳、7号墳、11号墳
図版12　1号墳出土遺物
図版13　1・6・8号墳出土遺物
図版14　5号墳出土遺物
図版15　9号墳出土遺物

Ⅰ 前　　言

明星古墳群のうち、11号墳は地元では狐塚と称して古来より周知の古墳であって、立木の伐開を避けてきた。昭和37年７月、三重大学歴史研究会原始古代史部会によって狐塚古墳の周囲に10基の小古墳が群在していることが確認され、始めて明星古墳群は全11基の古墳からなるものであることが判明した。現在、古墳群は県遺跡台帳に 2,288～ 2,298番号の古墳として登載されている。その後、同部会有志メンバーによって、44年夏７基の古墳測量図（第３図）が作成されたりした。

昭和46年10月11日、明星古墳群所在の地域で宅地造成工事が行なわれているという情報を明和町教育委員会は受け、早速県教育委員会に報告し、ともに係員が現場に赴いた。現場はすでに団地内街路の取り付け工事によって、７・11号墳の墳丘が½及び⅓削りとられていた。そこで、全古墳の所在を団地造成事業主である五十商事株式会社に明らかにし、その保存について協力を求めた。次いで、同月16日明和町教育委員会と業者が協議し、古墳２基の修復と古墳群が所在する団地造成予定地内の一画、約 2,000㎡の地を緑地としてその保存をはかるという回答を得た。が、この直後、施工業者への連絡の手違いか、10号墳が跡形もなく破壊されるという事態が生じ、悔を残すところとなった。

昭和48年５月に至り、業者より採算割れのため古墳緑地を一部宅地に変更したいという要望が出された。この件については度々明和町及び明和教町教育委員会は県教育委員会指導のもとに業者と協議を重ねたが、やむなく１・５・７・８・９号墳の５基を発掘調査し、他の５基は保存することに決した。そこで７月15日、町教育委員会と五十鈴商事株式会社との間で調査の委託契約を取り交わした。

調査は皇学館大学考古学研究会に依頼し、県教育委員会及び奥義次氏指導のもとに48年７月15日、１号墳から発掘調査に着手した。

１号墳を完掘し、９号墳の周溝・主体部及び５・８号墳の周溝の調査を終え、９号墳のたち割り、さらには5・8号墳の主体部調査にかかろうとした段階の８月初旬、県文化財を守る会及び明和町郷土文化を守る会より明星古墳群保存の要望が明和町当局に出された。８月10日両守る会、明和町、明和町教委、五十鈴商事の代表五者により、この件についての協議会がもたれ、その結果、５・７・８・９号墳の４基を保存し、これと振り替えに６号墳を新たに調査することになった。最終的には１・６号墳の調査破壊にとどまるという

進展をみた。

調査途中、上記のような調査計画の変更はあったものの、12号墳という小円墳の新たな確認、発掘前、円墳と考えていた５・６号墳は方墳という事実を得たりして、８月26日、降雨のため６号墳を覆ったテントの下で延36日にわたる発掘調査は完了した。

業者の好意で保存されることになった調査古墳（５・８・９・12号墳）については周溝を埋めもどし、調査の手を加えなかった古墳（２・３・４・７・11号墳）ともども、団地内の一画にうるおいのある緑地小公園として今後、整備保存を行なっていかなければならない。

なお、上記調査の体制はつぎの通りである。

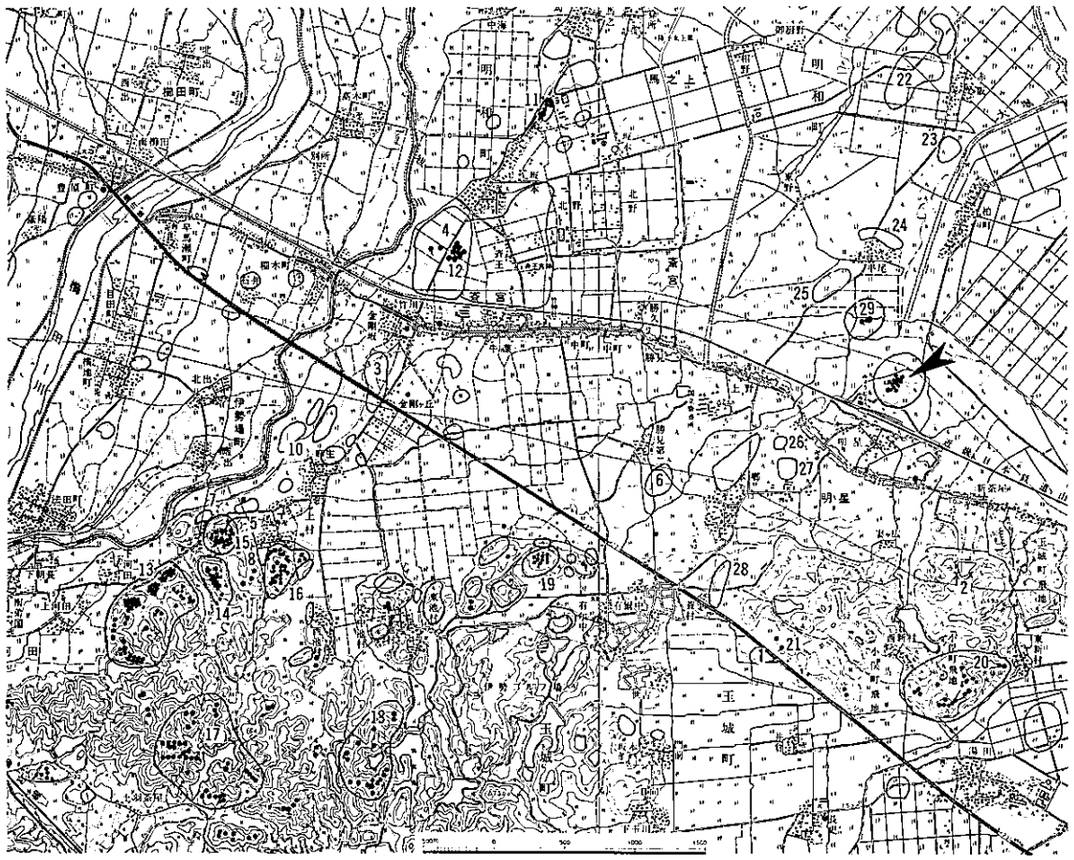
調 査 主 体　明和町教育委員会（教育長　潮谷英一）
調査費負担者　五十鈴商事株式会社
調 査 担 当　奥　義次（県立松阪商業高等学校教諭）
　　下村登良男（三重県教育委員会文化課主事）
調査事務局　青木　進（明和町教育委員会社会教育主事）
　　津田　隆（　　〃　　書記）
調査参加者　岡田登・加藤豊・村山邦彦・吉田義隆・鵜飼裕彦・川口平美・田阪能理子・林克彦・平田睦美・藤森鋼平・松永恵一・南秀典・館昭房・今井博・魚住洋子・岡村早希子・河合正子・塩山則之・杉本いすず・瀬子吉久・高倉佳代子・津田守一・宮坂信廣（以上、皇学館大学考古学研究会）草深やよひ・中村孝行・八木沼幸子）以上、同O・B）、中森英夫（上野市立府中中学校教諭）、塩崎美智子（松阪女子短期大学）

発掘後の遺物整理、作図は一切、皇学館大学考古学研究会が行なった。報文はそれぞれ分担して執筆し、章・節末にその名を記して明らかにした。ただ第Ⅲ章については皇学大学考古学研究会の諸君が草稿をなし、奥・下村両人が手を加え、また、全体の編集も両人で行なったことを付記する。　　（青木　進）

II 位　　置

(1) 地　　形

櫛田川と宮川にはさまれた伊勢平野南端部は「明野ケ原(面)」の名称で知られる平担な洪積台地が広い面積を占めている。国道23号線以北のこの地域東半の地形を大まかにながめると、南方より、標高30～50mの大仏山独立丘陵、それより北走する明星台地（上位面）やや低く明野台地（いわゆる明野ケ原、中位面に相当）、さらに海岸平野、砂堆列とつづき、これらがほぼ帯状にならんで緩やかに伊勢湾へ傾いている。このうち開析のすすんだところでは、丘陵・台地を切って—特に大掘川は西の斎宮台地と東の明野台地に分断——



第１図　明星古墳群位置図（国土地理院 1/25000　「松阪」「明星」）
・印：古墳、○印：遺跡

浅い谷底平野、氾濫平野を刻み、平担な地形にわずかに変化を与えている。

明星古墳群は、大仏山丘陵よりずっと北方に張り出した形の明星台地北端部にあたり東・西・北側には大掘川に接続する浅い氾濫平野がめぐる。古墳群は、ちょうどその低地に突き出た台地上に位置するわけで、標高９ｍ前後、前面の水田との比高は3～4ｍをはかる。

行政上は、多気郡明和町大字明星（旧下有爾）字小迫間（通称狐塚）に属し、すぐ南に近鉄明星駅があるという交通の便利さから、もとは山林であったが近年、宅地化がめだってきた。（奥　義次）

(2) 歴史的環境

明星古墳群周辺の遺跡分布を中心にして、時代別に概観することにする。

今回の発掘調査でナイフ形石器、フレイクの出土をみたが、類似のナイフ形石器をもつ先土器時代遺跡としては、大仏山南西の台地先端部に多量の散布面積（約40×80ｍ）を誇るカリコ遺跡(1)がある。大仏山北側の新池をはさむ東西の尾根の裾(2)にもナイフ形石器が確認されているので、明星古墳群出土のナイフ形石器もこれらの分布相の中で興味深いあり方を示しているといえよう。

縄文時代遺跡には、南勢バイパスの発掘調査で、早・晩期遺物を少量出した、宮川左岸の大藪遺跡と斎宮台地西縁で、発掘調査によって中・後・晩期遺物および土坑の確認された金剛坂遺跡(3)があるほかは、平野部には現在ほとんど見当らない。縄文遺跡の分布としては、むしろ宮川、櫛田川上・中流域および外城田川奥部が主要な舞台であったようだ。

弥生時代になると、前記の金剛坂遺跡・大藪遺跡では、ともに前期遺物や中期以降の方形周溝群が判明し、すでに４次にわたる発掘調査の実施された古里遺跡(4)では中期の竪穴住居址、後期の壺棺墓が判っており、同じ町内上村、神前山１号墳(5)の発掘調査の際にも前・後期遺物の検出をみた。その他、南西約２kmに北野遺跡(6)があり、上村・池村の丘陵縁辺には、岩内城山遺跡(7)、天王山遺跡(8)、世古遺跡(9)がならび、祓川右岸の自然堤防上では、下尾遺跡(10)がみられる。これらの遺跡分布からすると、斎宮台地の西部よりその南方のいわゆる玉城丘陵にかけての丘陵・台地縁辺に弥生時代遺跡の散在する姿がうかがわれる。

古墳の分布に目をうつすと、こうした傾向は、尚一層顕著になる。斎宮台地西部では坂本古墳群６基(11)、塚山古墳群12基(12)、金剛坂古墳群（消滅）が南北に連続し、多気・明和・玉城の三町にまたがる玉城丘陵上では、河田古墳群65基(13)、大塚山古墳群16基(14)、神

前山古墳群23基(15)、天王山古墳群23基(16)、上村池古墳群38基(17)、斎宮池古墳16基(18)、垣場古墳群10基(19)など、総数 300基をこす伊勢有数の古墳密集地帯を形成している。この事実は、これらの地域における弥生より古墳時代にかけての農耕社会が、まず順調に継続・発展しえたことを反映するものではなかろうか。

ところがこれに比べて、笹笛川以東より大仏山にかけての古墳分布は、大仏山では南側に偏在して大仏山古墳群19基(20)、カリコ古墳(21)などがあるが、大仏山北斜面以北では、古墳時代以降の散布地として斎宮台地東縁に北から赤坂(22)、皿起(23)、平尾(24)、志田(25)、水池(26)、黒土(27)、大塚(28)などの各遺跡があるものの、古墳は明星古墳群だけしか確実な例がなかった。最近、明星古墳群より北 500ｍの台地でぼた塚古墳群２基(29)が発見された。それにしても、明野台地全体の遺跡分布の空白が注目され、一見、奥津城としてふさわしい立地を有しながら古墳の確認されない大仏山北斜面、さらに古代村落の指標となる郷名をもつ中心的村落のないこと、近世以前の参宮街道が本郷より湯田へのコースに通じていたことなどを考えあわせると、この地域の内陸開拓史の劣勢は明白である。それにしても、およそ貧弱としかいえない明星古墳群のあり方を思うとき、明野台地に対する最前線の、それだけに周縁的な位置にあって、後の有弐郷に包括されるはずの小規模な共同体の姿が背後に想像されるがどうであろうか。（奥　義次）

(3)　古墳群の分布

古墳群は洪積台地縁辺部の一画、南北65ｍ、東西45ｍの範囲に密集して分布している。調査の段階では10号墳はすでになく、また新たに小円墳12号墳が調査中に確認され、明星古墳群は12基からなる群集墳であることが判明した。しかし、古墳群が所在する一画と道を隔てて西に隣接する一帯は、近畿日本鉄道株式会社所有地であるが、戦前にその地を均した時に、鉄刀、土器の出土もあったということで、かつては現在よりも多く数える古墳群であったと予想される。しかし、その実数は今明らかにすべくもない。

調査着手時、古墳群のうち、７号墳と11号墳は団地内街路により墳丘の½～⅓ほどを削られ、哀れな姿になっているものの、他は比較的よく原状を保っていた。幸い、７・10・11号墳については測量図（第３図）が残されていて、原形が手にとるようにわかる。

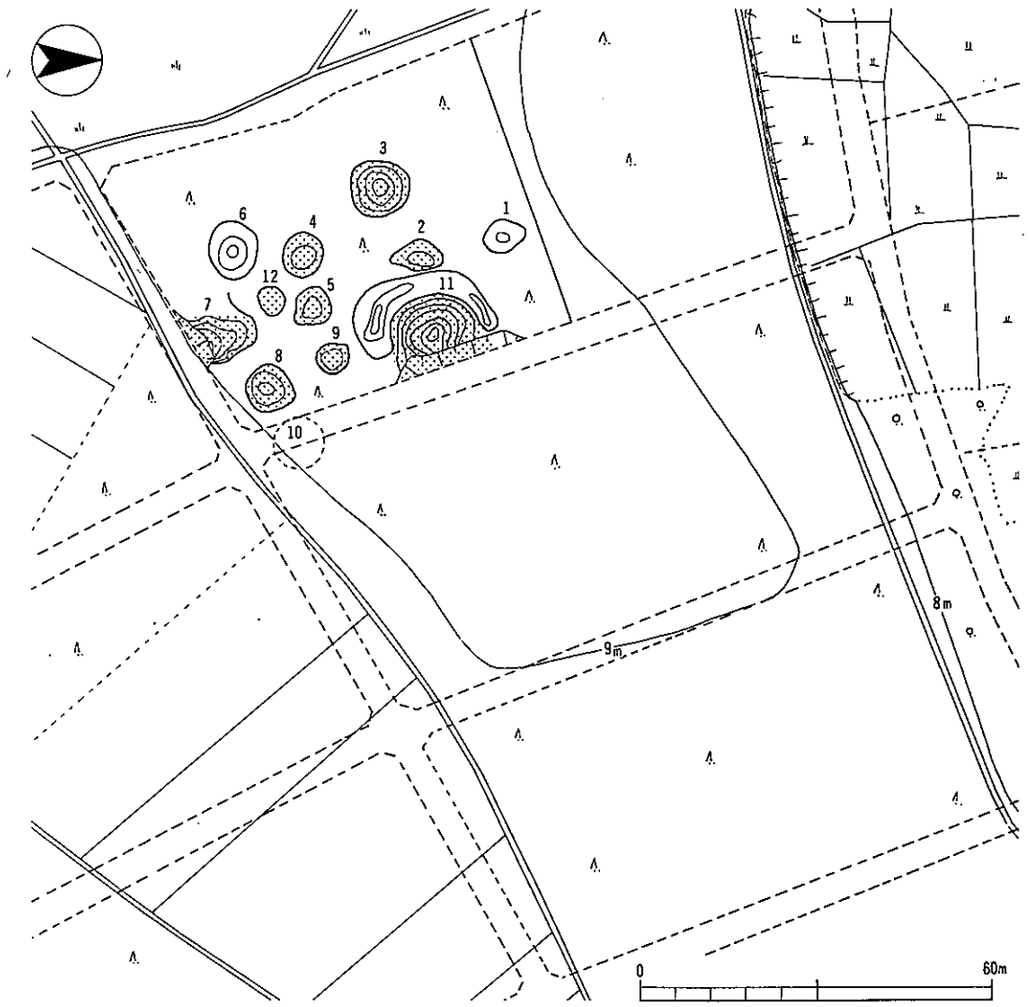
古墳群の分布を見ると、１号墳が古墳群中最も北に位置し、６・７・８・10号墳は南端に墳丘を接して一直線に東西方向に並ぶ。３号墳が少しはなれて西北の位置をしめ、４・５・９号墳は中央で東西方向に並んでいる。各古墳の規模は、11号墳が古墳群中、ぬきんでており、次に径10ｍ前後の３・６・８・10号墳が古墳群の周辺にあり、さらに、それら

の古墳より一段小さい径10ｍにみたない４・５・９号墳が中央につくられ、最小古墳の12号墳は、４～７号墳が築造された、その真中の余地に位置している。

それぞれの外形については、３・11号墳がほぼ円形をなし、他の古墳も円形はくずれているものの調査前、円墳と考えられた中で、７号墳のみは南北に長い前方後円形をなし、ただ一基特異な形状を呈しており、今もその原形をしのぶことが出来る。

なお、今回、調査の手を全く加えなかった２・３・４・７・11号墳と調査もされず破壊されてしまった10号墳の概況は次のとおりである。

２号墳　１号墳の南側、11号墳の西側周溝と接し、墳丘は南に崩れているようで、南北



第２図　古墳群の分布（網目：保存古墳，$^{1}/_{1,200}$）

8.0m、東西 6.0mをはかり、南北に長い楕円形を呈している。高さは西裾で 0.45 mをはかる。掘られた形跡はない。

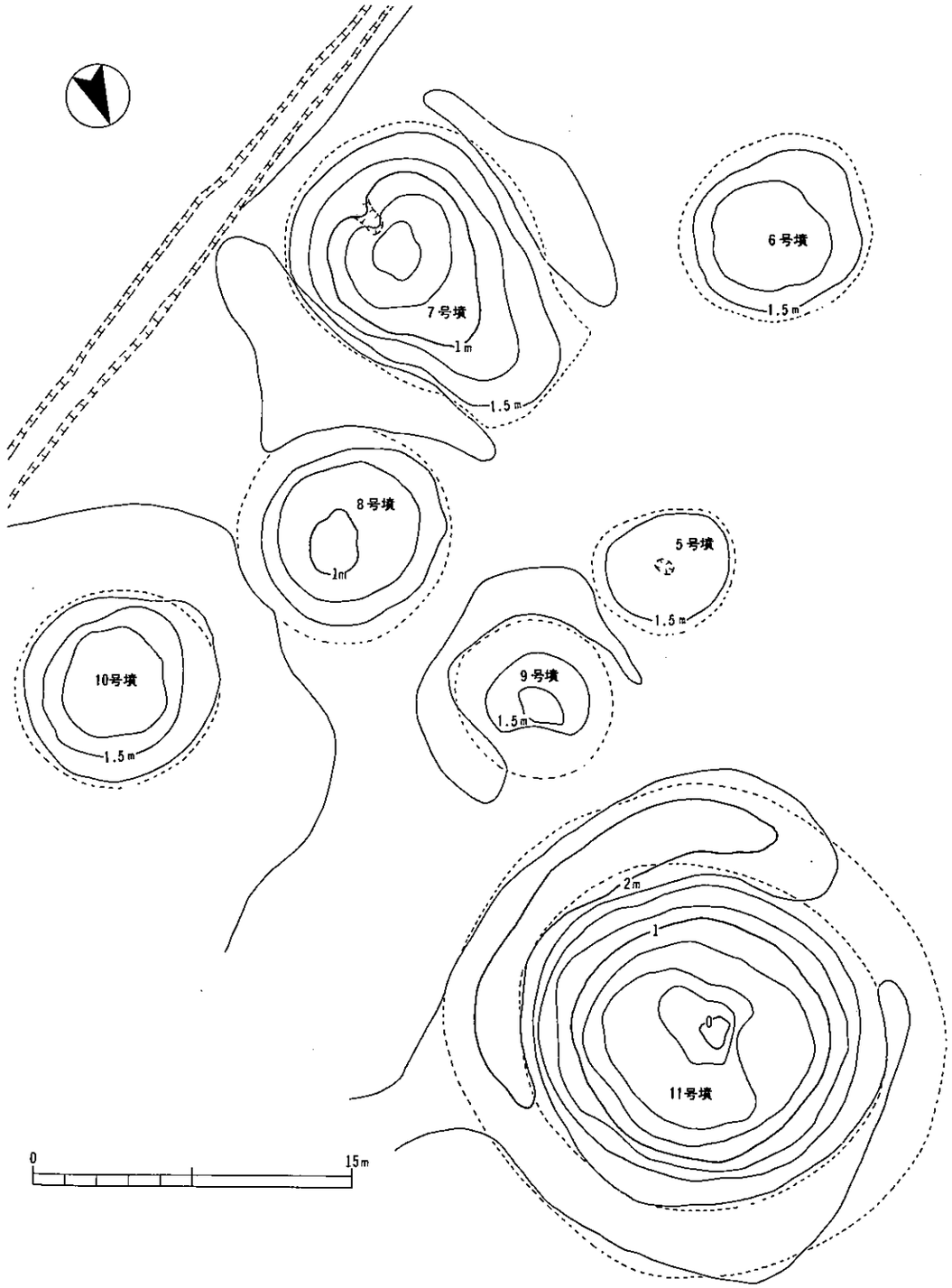
3号墳　古墳群中西北部に位置し、東に6mはなれて2号墳、南西に8mへだてて4号墳がそれぞれ位置する。墳丘の保存はよく、群中原形を最もよく保っている古墳である。墳丘測量の結果、東西10m、南北11m、高さ1mを計る円墳と考えられる。本墳の南裾部にくぼんだ場所があり、調査古墳が周溝を有することを参考にすれば、それは周溝の痕跡と考えてよい。

4号墳　北に12mはなれて2号墳、南に4mの間隔をおいて6号墳、東2mに5号墳が位置する。墳丘は南北 7.5m、東西 8.0m、高さは南側で 0.45 mは計る。6号墳調査時に、6号墳北側より本墳に向けてトレンチを少しのばしたところ、6号墳の周溝外肩より 2.0mはなれて、帯状の黒褐色土を確認した。このことより、本墳も周溝を有することは間違いなく、おそらく4号墳と5号墳の周溝は、お互いに相接するものと思われる。外形については円形か方形かは即断できない。なお、測量の際、墳丘表面で山茶椀の小皿を採取した。

7号墳　古墳群中、最も南に位置し、8号墳と墳丘を接している。墳丘の南½（後円部に相当する大半）は団地内街路取付けの際、削り取られた上、墳丘の西裾は盛土されたりして、原形を著しくそこねている。幸い、44年夏に測量図が作成されていて、原形を詳細に知ることが出来る。それによると外形は南北方向に長く、南の東西径が北のそれよりも大きく、前方後円形をなし、県遺跡台帳には前方後円墳として明記されている。墳丘主軸は磁北に対してN23° Wとなり、前方部を北に向け、全長15mをはかる。後円部の径10.5m、前方部平面は台形をなし、先端で幅4m、くびれ部は明確でないがそれに相当する部分で幅 7.5mとなる。墳丘基底線は前方部、後円部とも同一の高さにあって、裾から後円部までの高さは 1.1m、前方部までの高さは 0.3～ 0.5mとなる。古墳の東西側には古墳基底線より一段低いくぼ地があって、古墳全長に相当する長さで南北に細長く延びる。12号墳の調査時に、本墳とのつながりを調べるため、前方部西側の一部の表土を除去した結果、黒褐色土が帯状に延びることが確認された。これにより本墳にも周溝がめぐることが確実になった。

10号墳　団地造成工事により調査もされず破壊されてしまった古墳で、現在、街路と宅地になって跡形もない。かつては、8号墳の東2m、古墳群でも東南隅に所在し、南北径9m、東西径 9.5m、高さ 0.7mで、原状をよく保っていた古墳であった。

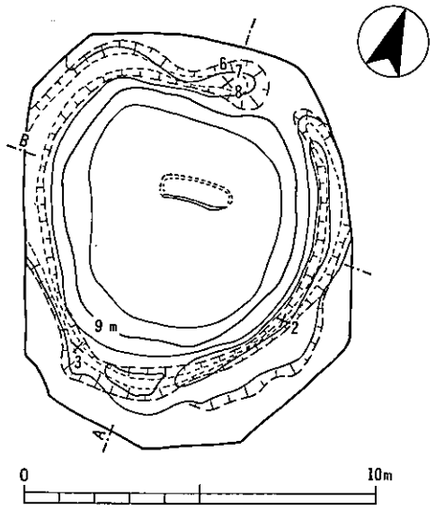
11号墳　団地内街路工事により墳丘東側⅓が削り取られ、極めて保存状態が良好であっ



第3図　古墳群測量図（$^{1}/_{300}$）

た古墳は瞬時に変容してしまった。それでも今に原状はある程度とどめている。規模は古墳群中最大であり、南北径16.5m、東西径16.8mを計り、 2.05m の高さを有する。墳頂より－1.8mの等高線が2.25m～4.5mの間隔を保って古墳の裾をほぼ一周し、裾から外方にかけて断面が浅いU字形を呈することから、本墳も周溝を有することは明らかである。周溝の状態は南側にもっともよく残る。この古墳が地元の人々から「狐塚」の名で呼ばれ、樹木の伐開はタブーとされ、ここのみ松等の植樹はされず、雑木林となっている。本墳はその規模の大きさからも本古墳群中での主墳的性格を有する古墳と想像される。

（下村登良男）



第4図　発掘後の1号墳（1/200）

III　調査の概況

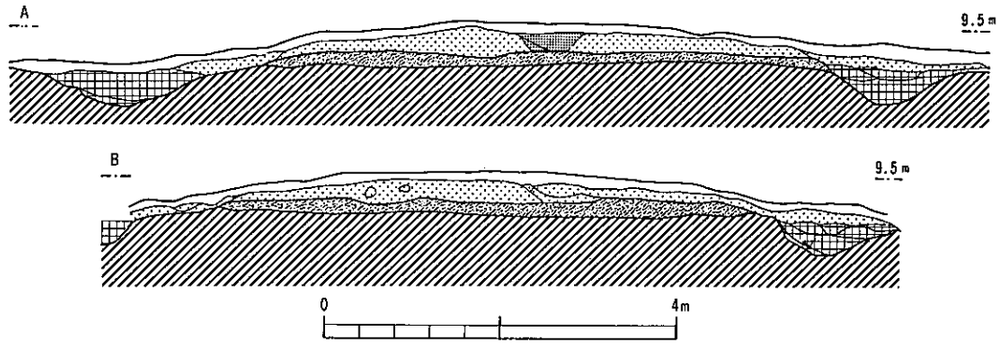
(1)　明星1号墳

位置　1号墳は明星古墳群中、最も北に位置するもので、南7mには2号墳、南東6mには11号墳があり、南西14mには3号墳が存在する。

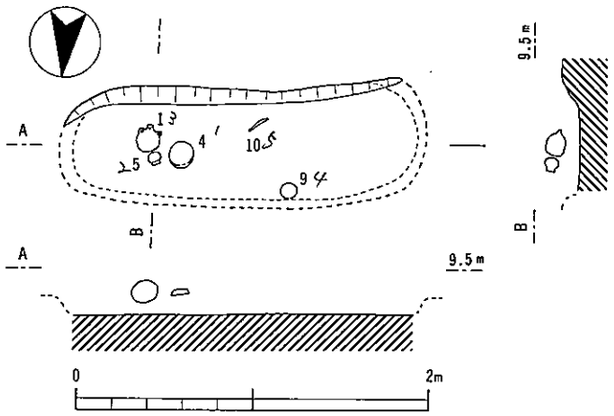
発掘前の状況　本墳はすでに南側だけを残して、三方を宅地造成工事により古墳の裾近くまで削られており、西側では周溝と思われる黒褐色土層の落ち込みが露出していた。墳丘規模は東西径6m、南北径7.5m、高さ0.4mを計る円墳と認められた。

墳丘　周溝の存在を予想してトレンチを設定し、さらに墳丘表土及び流失土を除去して全面調査を実施したところ、北東部ではつながらないが、断面U字状の周溝を確認した。その周溝底の中央を基点とした東西径 9.0m、南北径 8.8m、周溝外側の掘方から計る東西径は不明で、南北径10.0mとなり、平面形は円墳となる。主体部の調査が終了した後、墳丘を十字にたち割り墳丘の築成状況をみたところ、ほぼ平坦な赤褐色土層の地山に黒褐色土層がほぼ水平に、15～22cmほど推積しており、周溝を掘削する際切断しているが、この層が古墳営造時の表土と考えられる。墳丘盛土は黒褐色土層上にあり、赤褐色土層のみで、もっとも厚い墳丘中央部で30cmを計り、裾に行くにしたがい漸減する。盛土は埋葬主体を被覆する程度のもので、周溝の掘削土でたりる土量であったと考えられる。

内部主体　表土直下に副葬品がすぐにあらわれる状態で、主体部の追求は困難であった。主体部の南肩がはっきりと検出されたのに対して、これに対応する北肩は確認することができなかった。しかし、これらの検出された主体部の残存状況から、ほぼ東西方向に長さ



第5図　1号墳断面図（1/80）



第６図　１号墳主体部（ 1/40 ）

1.9m、幅 0.7m、深さ 0.2mの埋葬主体と推定される。主体の底は、盛土の最も下部にあたることから埋葬主体を旧表土上に東西に安置して赤褐色土でもって被覆したと想像される。なお、主体部付近に白灰色粘土塊が少量ずつ散らばっていたが、何に使用されたかは不明である。

副葬品は、主体部東寄りに須恵器提瓶１、短頸壺５、杯蓋４がかためておかれ、少し西にはなれて刀子10、土師器高杯９を検出した。

周溝　１号墳を取り巻く周溝は、赤褐色土層の地山を切り込んで作られた断面U字状のものである。北西部より北側にかけてほぼ一直線となり、さらに北東より南側かけては一段深くなる。また、北東部は、方形周溝墓の陸橋のような形が残り周溝は古墳の裾を一周していない。今回調査した古墳で周溝が古墳の裾を一周しないのは本墳だけである。

周溝の幅と深さは一定しておらず、東側では掘り方幅1.0m、底幅0.35m 、深さ（外の掘り方より溝底まで） 0.25m、南側はそれぞれ1.8m、0.25m、0.4m、北側ではそれぞれ1.4m、0.5m、0.25mを計る。周溝内の推積状況は、地山と同じ赤褐色土が最下層に薄くつもり、その上に厚く黒色土が推積する。さらに褐色ないし黒褐色土がつもるが、墳丘側より流れ込んだ盛土であろうか。このような推積によって周溝はその存在すら調査前に不明であったほど埋まっていた。

遺物は南東部において須恵器杯蓋２、南西部分の溝底で須恵器杯身３を検出した。また北側の周溝が一段と深くなる地点より土師器高杯の破片が一かたまりとなって出土し、それより西に１mはなれた周溝内で高杯の脚部２個体７・８とナイフ型石器34を検出している。

主体部遺物　須恵器・杯蓋(4)：口径12.5cm、器高 4.3cm、天井部は平らでそれからゆるく内彎し、口縁部は立つ。天井部と口縁部との間に段がつき、口縁端部の断面内側にも段を有する。製作技法は、右回りロクロを使用し、天井部にはヘラ削りが認められ、他はナデ整形。器体は灰白色で軟質、焼成は不良である。

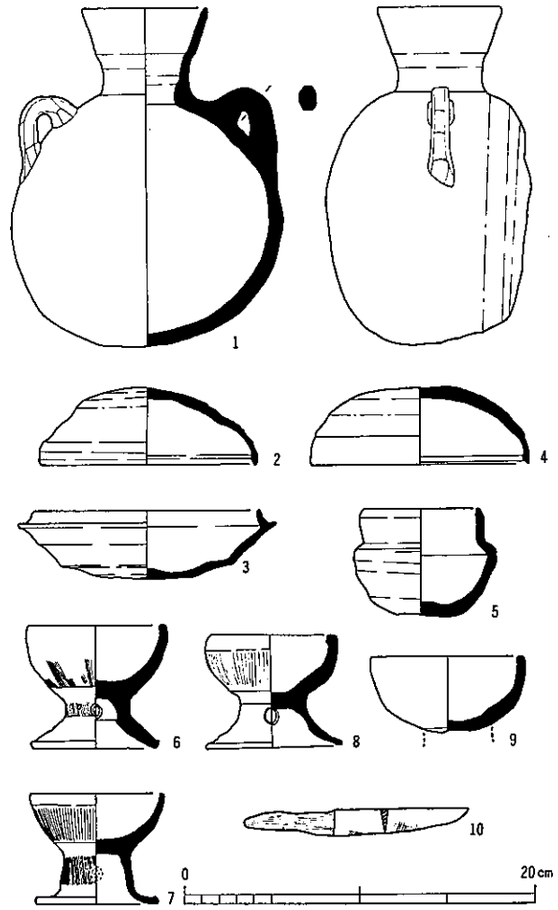
須恵器・短頸壺(5)：口径6.7cm、器高6.1cm。直立する短い頸部と肩が少し張る体部がつ

く。底部は指先でおさえて整形しているため凹凸が残る。

須恵器・提瓶(1)：器高19.3cm、体部最大径15.5cm。口径 7.2cmの頸部は内外面中ほどで器壁が張り出し、口端は丸くおさまる。体部両肩につく把手は手づくねの環状把手、体部前面は強くふくらみ、背面はヘラ削りして平らとなり、その厚さ11.7cmを計る。また前面に粘土板をあてている。焼成は良好で、よく胎土が焼きしまり、自然釉が附着する。

土師器・高杯(9)：杯部のみで、口径 8.6cm、口端はヨコナデし、ゆるく内彎しながら底部へと続く、底部は脚部をつけやすくするためにヘラで切目を入れている。

鉄器・刀子(10)：現在長12.8cm、刃長 7.6cm、刃幅 1.3cm、把長 5.2cmを計る。刃部には銹化した布が附着し、把部は鞘木の保存状況がよく把木の柾目がよく残る。



第７図　１号墳出土遺物実測図（ 1/4 ）

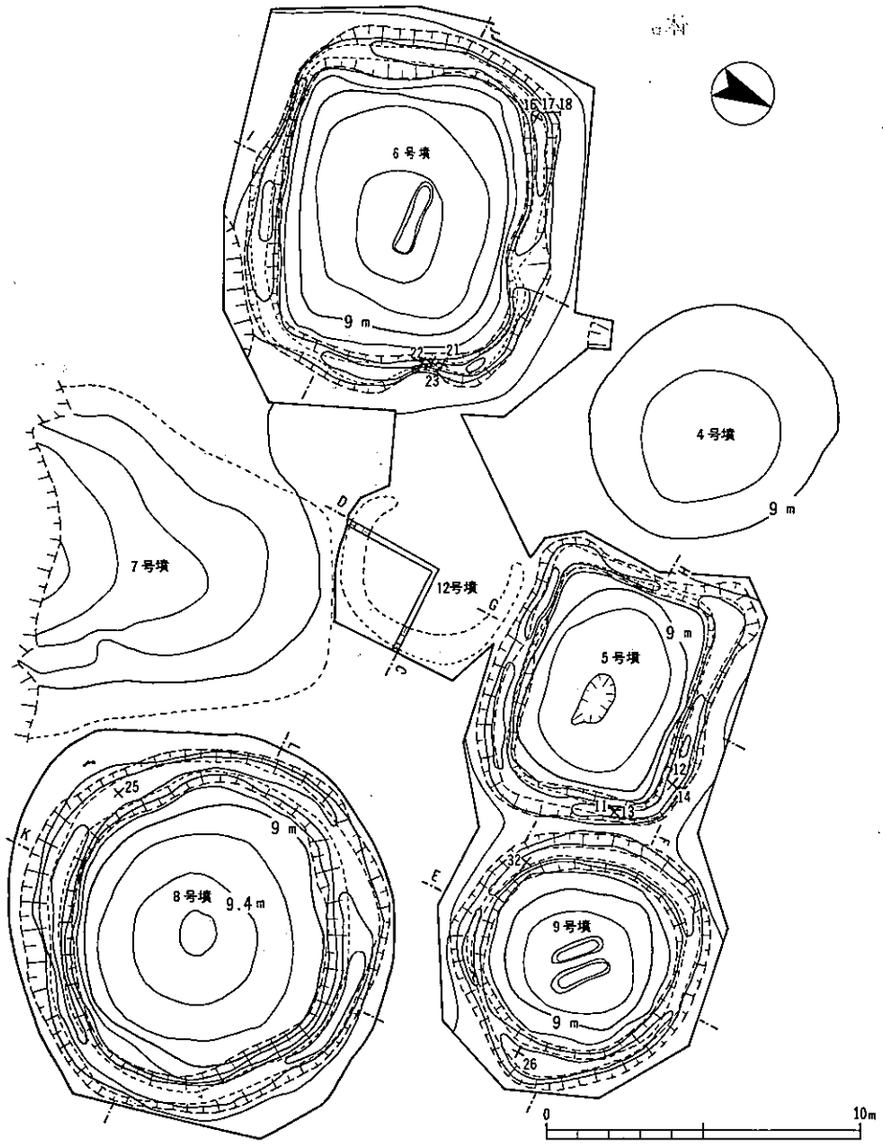
周溝遺物　須恵器・杯身(3)：口径12.8cm、器高 3.9cm、立上りは内傾し短く、底部はヘラ切りしたままで調整していない。

須恵器・杯蓋(2)：口径12.3cm、器高 4.4cm、深い天井部からゆるやかに内彎して口縁部に至る。口端はヨコナデし、天井部はヘラ切りのままで調整を加えていない。

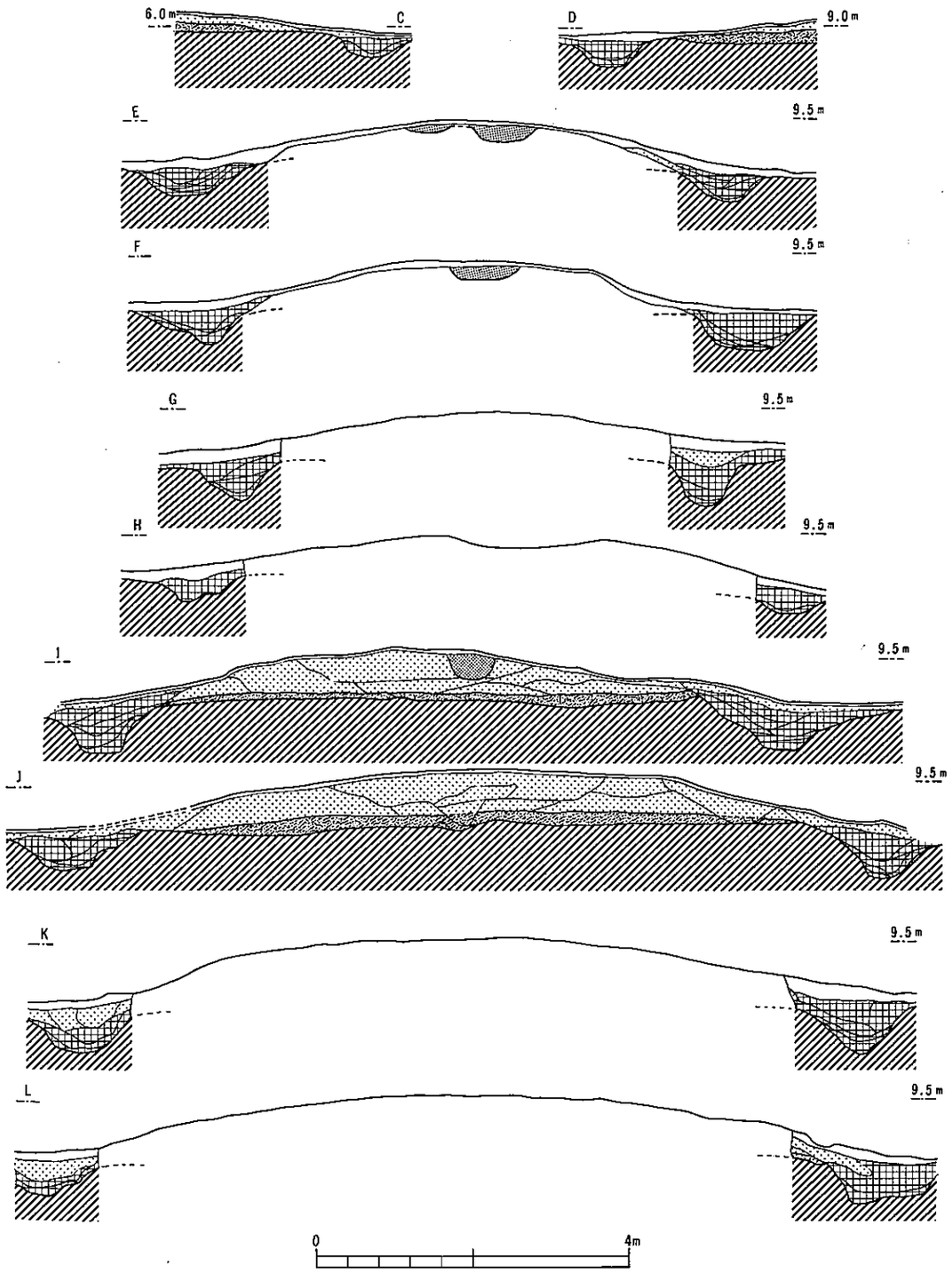
土師器・高杯（６～８）：口径7.2cm～7.9cm、器高6.3～7.0cmと器体の大きさにはそれほどの差がない。杯部は口縁部分が内彎し、口端はヨコナデされ、８のみ内側に肥厚する。脚部は、八字形に大きく開き脚端を内側に折りまげたもの（６・８）と脚裾が水平に外へ折り返されたもの（７）とがある。また脚部には透孔が二方にあけられている。調整は外面をハケ目、内面をナデ調整している。杯部と脚部との接合は、杯部底にヘラで切目を入れ、そこへ脚部をつけ、さらに脚内より粘土円板を張りつけ補強している。

小結　主体部遺物と周溝遺物のうち、須恵器杯蓋４と２、土器師・高杯９と７～８とは全く同巧の器物であって、主体部遺物と周溝遺物は同時期のものであり、時間的な隔りはないと推定される。須恵器の器形・手法の特長は陶邑古窯址群中ＴＫ209号窯の須恵器に類似するところから、本墳の営造時期を７世紀初頭に求めることが出来よう。

（藤森鋼平）



第８図　発掘後の古墳群（$^{1}/_{200}$）



第９図　各古墳の断面（上から12・９・５・６・８号墳，$^{1}/_{80}$）

(2) 明星5号墳

位置　5号墳は古墳群中央部に位置し、北13mに2号墳、東2mに9号墳、南 1.5mに12号墳、西2mに4号墳が所在する。

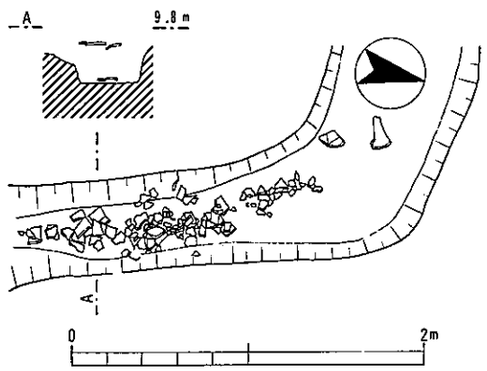
発掘前の状況　墳頂部に長径2m、短径1mの楕円形状の浅い盗掘痕らしいものがあり、東西7m、南北6m、高さ 0.4mで東西にやや長いが円墳と考えられた。

墳丘　表土及び裾に推積した流失土を除去して調査を実施したところ、墳丘の周囲に地山を切り込んだ断面U字形の溝を巡らし、その溝の追求により東西方向に長い方墳であることが判明した。その周溝底から計った墳丘の東西辺7.5m、南北辺 5.75m、周溝の外掘方間の長さは東西8.2m、南北7.0mである。墳丘の高さは北の溝底より1.3m、9号墳と接する東側では1.2mを計り、周溝の外掘り方上からは0.8m余りを計る。

本墳は、調査途中で保存されることに決定したため、周溝調査のみで主体部及び墳丘の築成状況は不明である。が、周溝内肩部分に約10cm前後の黒褐色土層がほぼ水平に巡ることから、1号墳同様、この黒褐色土が旧表土に当り、この土層上に本墳は築成されたと考えられる。

周溝　地山の黄褐色粘質土を切り込んだもので墳丘の周囲を巡り、溝内には黒色土が充満していた。溝の幅と深さは一定しておらず、特に南・西・北側周溝の外掘り方が内彎し周溝のコーナーが突出した格好になっている。東側周溝では掘り方幅1.0m、底幅0.3m、深さ0.33mを計り 、北側周溝ではそれぞれ1.0m、0.35m、0.48mとなる。

北側周溝中から須恵器横瓶12、杯蓋14、土師器杯15、東側周溝中からは須恵器横瓶11、直口壺13がそれぞれ周溝北コーナー寄りで検出された。とくに横瓶11は、東側周溝中央部より北辺にかけて破片となって散らばった状態で出土した。遺物はいずれも溝底より20cmほど遊離して黒色土中に見られた。

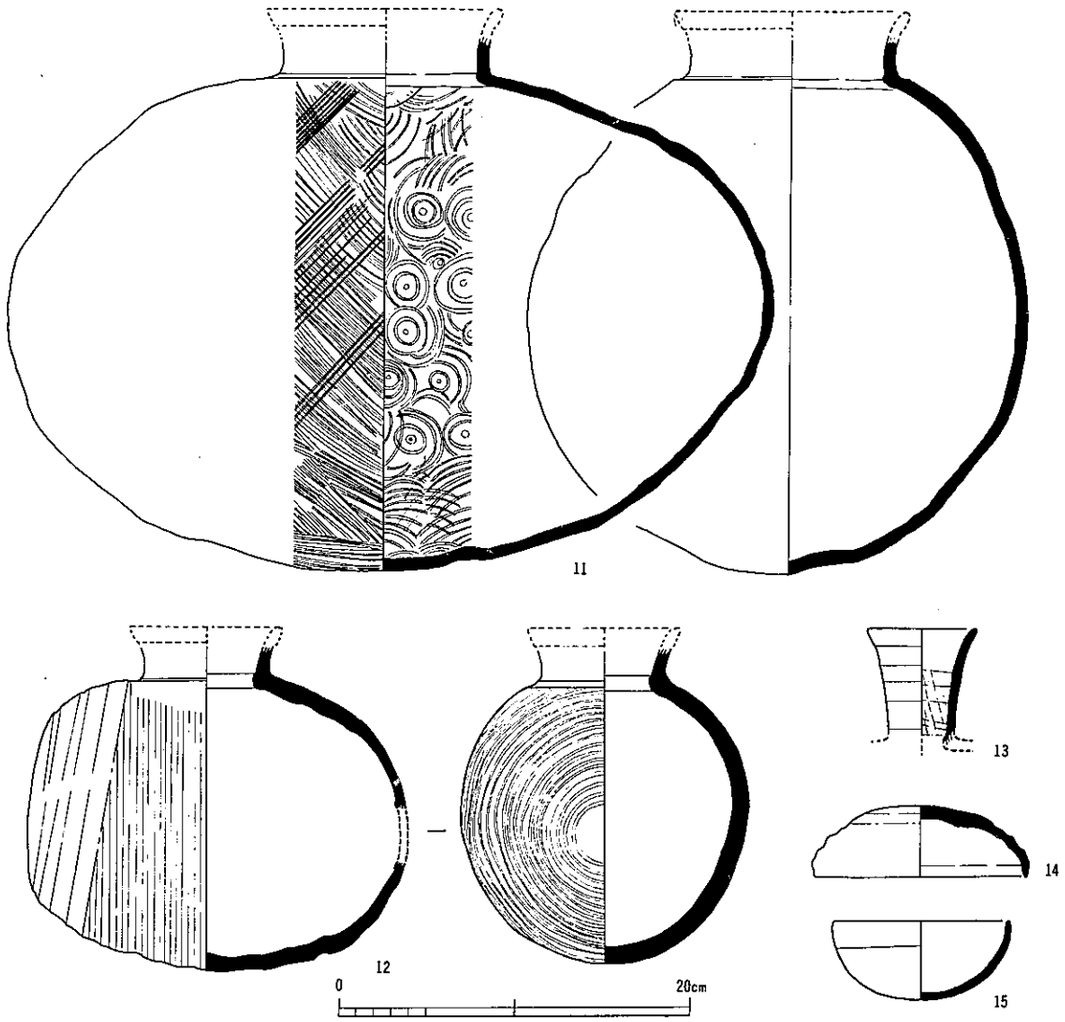


第10図　周溝遺物出土状況 1/40)

周溝遺物　須恵器・杯蓋(14)：口径12.3cm、器高 4.0cmで丸い天井部からゆるやかに内彎し口縁部で立つ。天井部はヘラ切りのままで調整を加えず、口縁部はヨコナデし、端部は丸くおさまる。

須恵器・直口壺(13)：口径 6.2cm、わずかに逆八字形に開き、口端で外反する口頸部である。口端は外面に鈍い段を有し、口頸部内面にはロクロによる成形の跡がよく残る。体部は不明。

須恵器・横瓶（11・12）：大小2個出土した。11は長径43.7cm、短径28.5cmの体部に直立する短い頸部をつけたものである。口端は欠失し不明であり、口頸部と体部との接合のために粘土を内面に張り付けている。内面には同心円叩き文、外面には平行叩き目がついている。12は長径21.7cm、短頸16.3cmの体部に外反する短い口頸部をつけたもので、11と同



第11図　5号墳出土遺物実測図（1/4）

様口端が欠失している。内面はナデ、外面は底部がヘラ削り、その他はカキ目調整。カキ目のある方は強くふくらみ、粘土板をあてている。

土師器・杯(15)：口径10.0cm、器高 4.5cmで底部より強く内彎して口縁部に至る器形。口端は丸くおさまり、口縁部外面に粘土紐の継ぎ目が残る。焼成は悪く非常にもろい。色調は灰褐色を呈する。

小結　周溝遺物のうち、須恵器・杯蓋14は1号墳のそれと同巧のものであり、1号墳の須恵器と時期的に差はないものと考えられ、本墳の築造時期も1号墳と同時期に求めることが出来よう。また、周溝の外掘り方が内彎する部分でも、南側周溝の南西コーナー寄りの部分については、12号墳の周溝のカーブと軌を一にし、12号墳の存在が掘り方を内に曲げざるを得なかったとも解釈できるが、北・西側周溝でも外掘り方が内彎しているので即断はできない。　　（鵜飼裕彦）

(3) 明星6号墳

位置　6号墳は古墳群中の最西南部に位置し、他の古墳同様ほぼ平坦なところに築造されている。北4mに4号墳、東6mに7号墳が所在し、調査中新しく東北3mに12号墳が確認された。

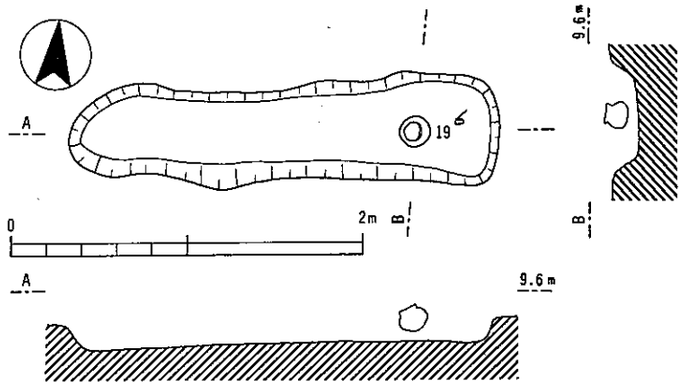
発掘前の状況　調査以前の墳丘測量によれば、等高線がほぼ等間隔で古墳を巡り、南北8.5m、東西10m、高さ0.65mで東西方向にわずかにひずんだきわめて保存のよい円墳と考えられた。

墳丘　墳丘表土及び流失土を除去して全面調査を実施した結果、墳丘の周囲に地山を切込み、断面U字状の溝を巡らした、東西方向に長い方墳であることが判明した。周溝底を基点として計った東西辺10m、南北辺 8.5m、周溝掘り方からはそれぞれ11.5mと 9.5mとなる。墳丘の高さは南の周溝底部よりみて 1.3m、西側では 1.1mを計り、周溝掘り方上からはそれぞれ 0.9m、 0.7mを計る。

主体部の発掘が終了した後、墳丘をたち割り、墳丘の築成状況をみたところ、ほぼ平坦な黄褐色地山の上に約10cm前後の黒褐色土層がほぼ水平に堆積しており、周溝掘削の際、切断されている。この黒褐色土層が古墳築造以前の表土であると考えられる。墳丘盛土は、この旧表土上にあって最も厚い中央部で0.65mを計る。墳丘盛土は、いくつかの層に細分できるが、概観すれば下半は黒褐色土を混じた茶褐色土層、上半は地山の黄褐色粘質土を混じた黄褐色土層である。埋葬主体は盛土でも上半の層位中にあることから、全体に周囲の土を盛り上げた後に埋葬主体を置き、周溝の掘削土でもってそれを被覆し、そして墳

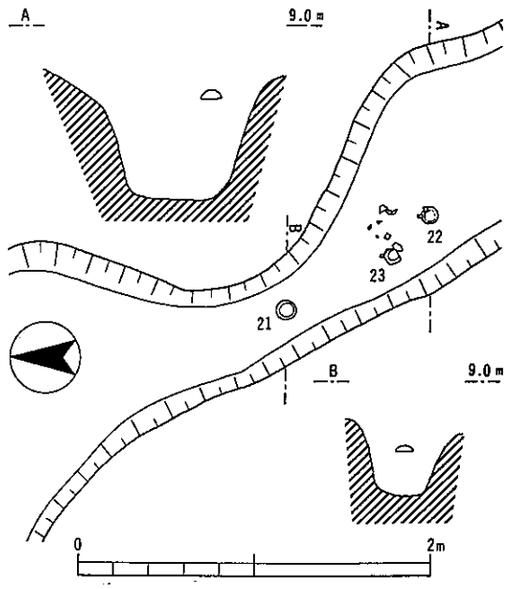
丘自体をさらに盛上げたと考えられる。

内部主体　主軸中央部よりやや西に偏して埋葬主体が検出された。長軸はE 8°Sの方向で、長さ2.45m、幅6.5m、深さ 0.16 m、断面が台形を呈し、これが木棺直葬の跡と考えられる。主体東端部には、灰色粘土がびっしりとかたまって検出されたが、木棺の木口に当てたものであろうか。なお、埋葬主体を納める墓拡は検出されなかった。主体部の副葬品としては、主体部東端に立てた状態で短頸壺19が検出されたのみである。



第12図　6号墳主体部（1/40）

周溝　地山の黄褐色粘質土層を切り込んだもので墳丘の周囲を巡り、溝内には黒色土が充満していた。溝の掘り方幅と底幅及び深さは各辺とも一定していないが、それぞれ 0.4～1.55m、0.1～0.7m、0.4～0.45mを計り、各辺の中央が広く隅にいくほど狭くなる。東辺の溝の中央部では外肩が大きく内にくい込む。この部分から、須恵器21～23が一つのまとまりをもって検出された。北に天井部を上にして杯蓋21が、70cm程離れて立てた状態で無蓋高杯23が、さらに20cm離れて21と同様に杯蓋22がそれぞれ出土した。また、北辺の周溝では土師器甕16～18がまとまって検出された。このように、古墳群中でも本墳の周溝内に、最もまとまりある状態で、遺物が検出された。



第13図　周溝遺物出土状態（1/40）

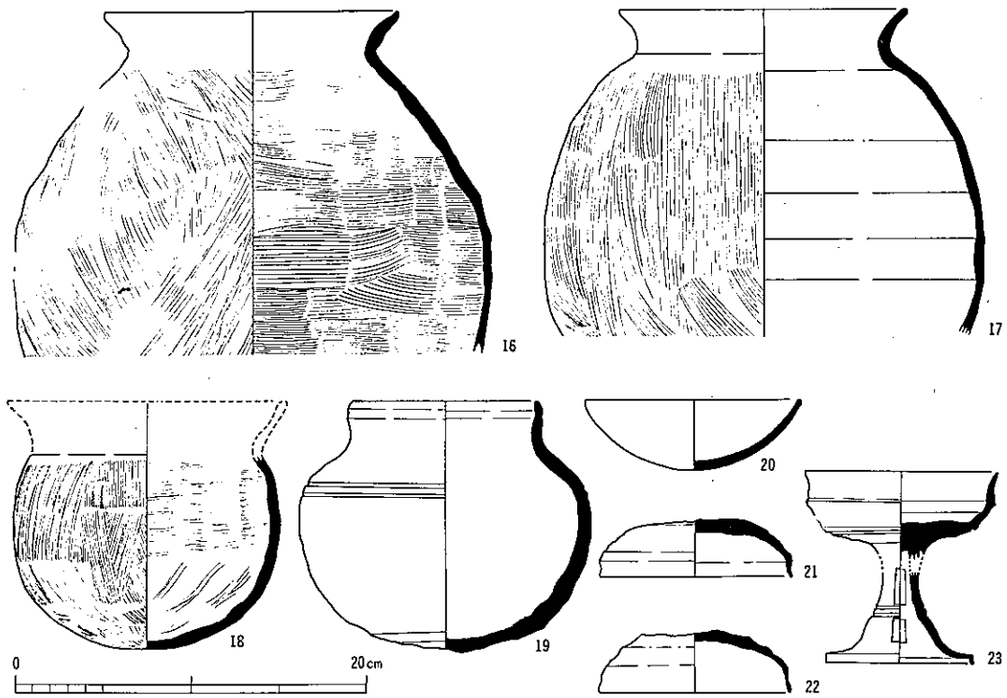
主体部遺物　須恵器・短頸壺(19)：口径14.3cm、高さ16.0cm。口縁部は直立し、中央部に内外両面より凹線が入る。ほぼ球形の胴部には二条の凹線がほどこされる。底部は

左回りのロクロからヘラで切り離したのみで未調整である。他は全面的にヨコナデをほどこして調整している。

周溝遺物　須恵器・杯蓋（21・22）：2個体とも口径11.0cm、高さ 3.4cmと全く同じであり口縁部は断面が「く」の字形を呈している。製作技法は左回りロクロを使用し、天井部はヘラ切りしたままで整形していない。天井部内面は指先でおさえたために、うずまき状の指圧痕がある。

須恵器・無蓋高杯(23)：口径11.0cm、器高10.8cmの小型の長脚二段すかしの高杯である。杯部は口縁の外彎度が少なく、ほぼ直立し、口端をやや外方にひねり出している。底部は左回りロクロでヘラ削りをほどこし、底部と体部との間にヘラ描きの一条の凹線を巡らす。脚部は細い筒部とラッパ状にひろがる裾部からなり、二方に二段の細長い透孔がはいる。その間に二条の凹線を巡らし、脚端は直立する。全体に丁寧なヨコナデの調整をおこなっている。黒灰色を呈し焼成は良好である。

土師器・甕（16・17・18）：16、17は口径16.4～16.8cmを計り、ゆるく外反する口縁部をもつ長い体部の甕。16は口縁端部がわずかに直立し、17は丸くおさまる。18は口縁部を欠くが、口径に対して器高の小さい小形の甕である。いずれも体部外面は縦方向の荒いハ



第14図　6号墳出土遺物実測図（1/4）

ケ目、内面は16が横方向のハケ目、17にはハケ目はなくナデ、18は上半を横方向のハケ、下半をヘラで削って、それぞれ調整している。

土師器・杯(20)：口径12.4cm、器高 4.0cm。底部よりゆるやかに内彎し口縁部に至り、口縁端部は丸くおさまる。口縁部と内面は横ナデ。底部はハケ目調整。

小結　6号墳は木棺を直葬した内部主体を有する、東西に長い方墳である。築造時期については、出土した須恵器の形態・手法が陶邑古窯址群中でもＴＫ 209号窯出土のものに類似するところから7世紀初頭と考えることが出来よう。　（松永恵一）

(4) 明星8号墳

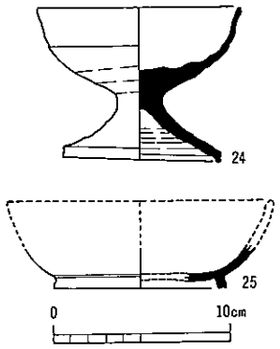
位置　本墳は、古墳群中の東南部に位置し、他の古墳同様ほぼ平らに近いところに築造され、7号墳、9号墳及び今は現存しない10号墳を結ぶ三角形の要に当る位置にある。

発掘前の状況　街路工事の排土が、墳丘に盛りあげられており、その形態・規模は明確でなかった。そのため排土を取り除いて、旧形に復する作業を行なった。その際、打製石錘高杯24が出土した。測量の結果、等高線がほぼ等間隔で古墳を巡り、南北径 9.0m、東西径9.8m、高さ0.8m、上面が平坦な円墳であった。

墳丘　他の古墳同様、墳丘の表土及び流失土を除去することから調査を始めた。その結果、墳丘の裾に地山を切り込んだ周溝が巡ることが判り、その溝の追求により、溝底中央からの南北径10m、東西径11m、周溝外掘り方からのそれぞれの径11.5m、12mを計る南北方向にわずかにひずんだ円墳であることを再確認した。墳丘の高さは、北側の周溝底部より 1.5m、西側では同様に、1.4mを計り外掘り方からでは、それぞれ0.9m、0.8mである。当初、墳丘の築成状況及び主体部を追求する予定であったが、本墳が急拠現状保存されることになったため、周溝調査のみにとどめた。したがって、それらについては不明である。

周溝　地山の黄褐色土層を切り込んだもので、墳丘の周囲を巡り、溝内には黒色土が充満していた。溝の幅と深さは、各辺とも一定でなく、東と南側の外肩は街路工事のために不明確である。北側では掘り方幅 1.5m、底幅 0.1m、深さ 0.6mで断面Ｖ字状をなし、西側では掘り方幅1.5m、底幅1.0m、深さ0.5m、外掘り方にゆるやかに続く断面Ｕ字状をなしている。南側の溝の中央部より弥生式土器が黒色土下層で検出された。周溝の内肩部に黒褐色土層が巡ることにより、墳丘は他の古墳同様、ほぼ平坦な旧表土上に盛り上げられたものであろう。

遺物　須恵器・高杯24も前述したような状態で出土したため、確実に本墳の築成にかかわると断定できる遺物は何も検出されなかった。なお、周溝内より弥生式土器片、灰釉陶器



第15図　8号墳出土遺物実測図（1/4）

片25が出土した。

須恵器・高杯(24)：口径11.6cm、器高 8.7cmの小形の高杯で、杯部は口縁の外彎度が少なく、口端をわずかに外へひねり出して丸くおさめる。体部へ移行する部分に段がつき、ヘラ削りをした底部をもつ。脚部は底部との接合部から「八」字形にすぐ開き、脚端は断面U字形をなして立つ。

灰釉陶器・杯(25)　高台の部分のみを残す小破片で全形は不明。高台は張りつけており、外方に強く踏んばった短いものである。小破片であるがシャープな焼成の印象を受け、破片には釉は認められないが灰釉陶器であろう。古墳の供養をした時、使用された供膳容器であろうか。

小結　周溝のみの調査であるためか、本墳の営造時の確実な遺物は何も検出されなかった。須恵器・高杯24は先にふれたように本墳と直接の係わりはないかも知れないが、今回の調査で出土した他の古墳の須恵器と同時期のものであろう。　（林　克彦）

(5)　明星9号墳

位置　9号墳は11号墳の南、古墳群の中央部東側に位置し、5号墳とは西側で隣接する。他の古墳同様ほぼ平らに近いところに築造されている。

発掘前の状況　宅地造成に伴う街路工事の排土が盛り上げられ、墳丘の規模・外形は明確でなかった。排土を取り除き原形に復した後の地形測量によれば、墳丘規模は南北7m、東西6.5m、高さ0.7mを計る、きわめて保存のよい円墳となった。

墳丘　表土及び流失土を除去して全面調査を実施した結果・墳丘の周囲に地山を切込んだ断面U字状の溝を巡らす円墳であることを確認した。溝底中央で計った南北、東西径はともに7.0m、周溝の外掘り方からはそれぞれ7.85m、8.25mとなる。墳丘の高さは北の周溝底部より0.77m、周溝外肩上では0.58mを計り、東ではそれぞれ1.05m、0.7mを計る。

本墳は保存されることになり、墳丘のたち割り調査を実施していないので盛土の築成状況は不明であるが、周溝内肩に黒褐色土層が巡る事により、他の古墳同様、ほぼ平坦な黒褐色土層の旧表土上に盛土がなされたと考えられる。

内部主体　調査の結果、この古墳には二基の埋葬主体が検出された。これらの主体は墳頂中央部に、長軸方向を同じにして並んでいる。2基の埋葬主体のうち東側のを第1主体、南側のを第2主体とした。両者の先後関係は主軸が同一方向に並び、何等の切合い関係も認められず、また出土須恵器の型式差も認められない点より不明であり、同時埋葬の可能

性もある。

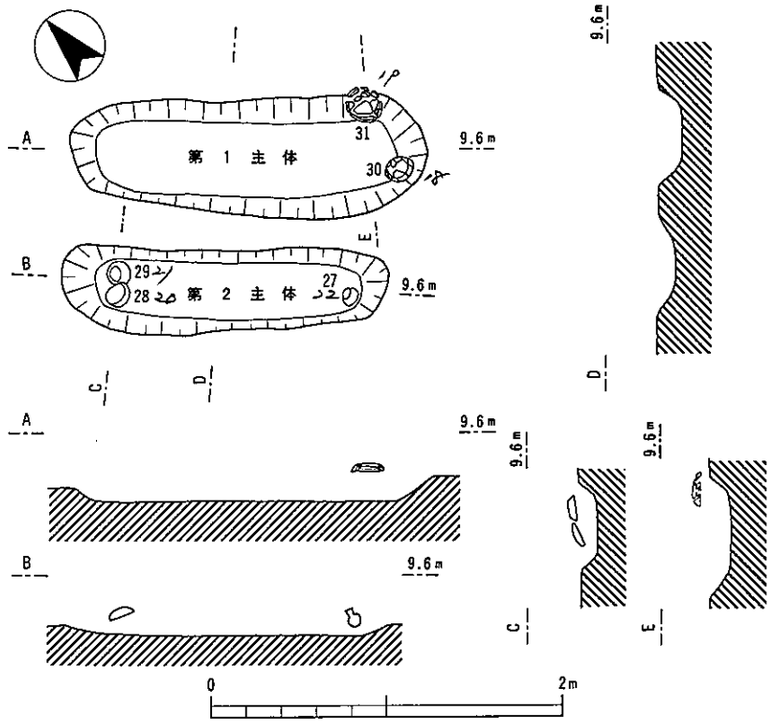
第1主体：主軸方向はN48°Wで長さ2.1m、幅0.6m、深さ0.12m、断面孤状の浅い埋葬主体である。東南端部では灰色粘土塊が検出されたが、土中に直葬された棺の木口を補強したものであろうか。

棺内には副葬品として東南端部の灰色粘土塊上に杯身(30)、杯蓋(31)が裏がえしに、あるいは上向きに約30cm離れて並べられていた。

第2主体：第1主体の西に 0.2m離れて第2主体がある。主軸の方向は第1主体と同方向であり、第1主体と同じ形状をなすが、長さ1.9m、幅0.45m、深さ0.1mと第1主体よりわずかに小形である。両端には第1主体と同様灰色粘土塊が置かれ、壁面でも部分的に灰色粘土が検出された。

棺内には副葬品として東南端部に直口壺27が立てた状態で置かれており、さらに北西端部には灰色粘土塊上に杯身29、杯蓋28がセットとして組まずに裏がえしに、あるいは上向きに重ねて並べられていた。

周溝　地山の黄褐色粘質土層を切り込んだもので墳丘の周囲を巡り、溝内は大部分黒色土で埋り、溝底に黄褐色土を混じる粘質上が、厚いところで8cmほど堆積していた。溝の幅と深さは一定していないが、西側では掘り方幅 1.1m、底幅 0.3 m、深さ0.3m、南ではそれぞれ1.2m、0.2m、0.57mを計る。周溝内では東側より須恵器・広口壺26が黄褐色土上面で検出され、西側の5号墳と接する地点では須恵器・甕33の底部が黒褐色土上面で出土している。



第16図　9号墳主体部（1/40）

第１主体遺物　須恵器・杯身(31)：口径10.7cm、高さ 3.6cm、立上りは内傾し短い。底部はヘラによる切りはなしのままで、調整していない。

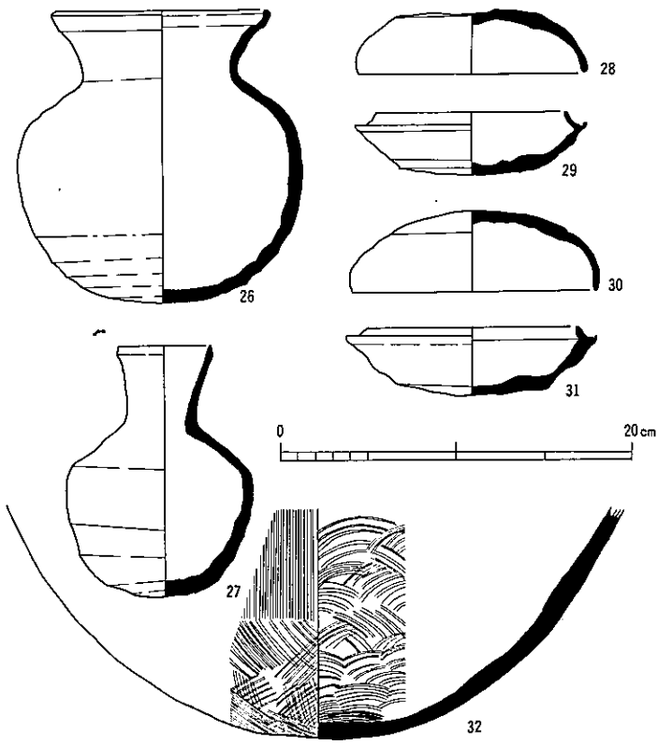
須恵器・杯蓋(30)：口径14.0cm、高さ 4.6cm。丸い天井部といくぶん内彎気味に立つ口縁部を有し、口端は丸くおさまる。天井部はヘラ切りしたままで調整していない。

第２主体遺物　須恵器・杯身(29)：口径11.8cm。立上りは短く内傾し、長さも 0.5cmと短めである。底部はヘラ切りのままで、ヘラの跡がよく残る。

須恵器・杯蓋(28)：口径13.0cm、高さ 3.5cm。平らな天井部からゆるやかに内彎しながら口縁端部に至る。天井部はヘラ切りのままである。杯身29とセットになる。

須恵器・直口壺(27)：口径 5.0cm、高さ14.1cm。口縁部の長さ 4.5cmでやや外反し、口端は引き出されて断面三角形を呈する。胴部は最大径10.7cm、なで肩で下部が少し張っている。底部は丸底でヘラ切りのままである。その他はヨコにナデて調整をしている。

周溝遺物　須恵器・広口壺(26)：口径12.0cm、高さ15.5cm。口縁部は逆八字形に短かく開き、口縁は外面に引き出されて、段がつく。体部は丸く、やや上下につまって最大径と器高が同じ大きさとなる。整形は内外ともヨコナデ調整。底部外面は左回りのロクロを使用してヘラ削りをおこない、さらに台上に逆さに置き、ヘラで右手前方向へていねいに削っている。



第17図　９号墳出土遺物実測図（1/4）

須恵器・甕(33)：底部のみ出土した。外面は平行叩き目、内面は同心円叩き目で整形している。

小結　本墳は２基の木棺を直葬した径 7.0ｍの小円墳である。２基の埋葬主体より検出した副葬品には時間的差が考えられず、主軸の同一とも相まって２主体は同時に合葬されたものであろうか。また、５号墳で多量の須恵器が検出された地点と隣接して、周溝内の同レベルで須恵器・甕が検出されている。これらの事実は当古墳群の葬送儀礼を考える上に参考となる。

築造時期については、出土した須恵器の形態・手法が陶邑古窯址群ＴＫ 209号窯のものに類似することから、７世紀初頭に求めることが出来よう。（松永恵一）

(6) 明星12号墳

位置　５号墳と７号墳とにはさまれ、５号墳とは周溝を接し、７号墳とも同様な状態である。西にやや離れて６号墳がある。

発掘前の状況　37年度の分布調査では見過され、今回の調査でその存在が始めて確認された。発掘前の地形測量の際、５・６・７号墳の三つの古墳の間にわずかな地面の盛り上がりが認められ、径４ｍ、高さ 0.2ｍの小円墳と考えられた。また５号墳周溝調査において同墳の周溝が、12号墳をさけているように内彎していた。

墳丘　６号墳周溝調査時に、同墳東側の周溝突出部と12号墳との関係を調査するため、12号墳西側の表土及び流出土を除去したところ、何も検出されなかった。12号墳の南側である７号墳側も同様に調査したところ、黒色土のびっしりつまった溝が検出された。７号墳周溝の可能性もあるため、さらにこの溝の南側を調査し、７号墳周溝を確認した。これらのことより、12号墳は周溝を持つ古墳であることが判明し、続いてこの黒色土の帯の上面を追求していったところ、12号墳は南北径 4.5ｍ、東側及び南側周溝の外掘り方からの高さそれぞれ0.35ｍ、0.3ｍ、南側溝底からの高さ0.6ｍを計る小円墳となった。

なお、本墳は当初調査対象にされていなかったが、所在箇所が宅地となる予定であったので、調査の手を加えた。しかし、急転保存することに決したため、調査は周溝の確認のみにとどめた。

周溝　墳丘を一周せず、６号墳側が切れる馬蹄形をなしている。東側では掘り方幅 0.9ｍ底幅0.4ｍ、深さ0.25ｍ、南側では掘り方幅0.8ｍ、底幅0.4ｍ、深さ0.3ｍの断面Ｕ字形をしており、周溝の断面観察によると、当墳も他の古墳同様、旧表土に周溝部の掘削土を盛り上げたものであろう。また周溝の埋土状態は、最下層に地山の黄褐色土に黒色土の混じたのが溝の両側から流入し、その上に黒色土が堆積しているのが観察された。

内部主体　６号墳周溝突出部との関連をみるために、西側の表土及び流失土を除去したが、盛土はわずか10cmほどで、主体部を検出することができなかった。

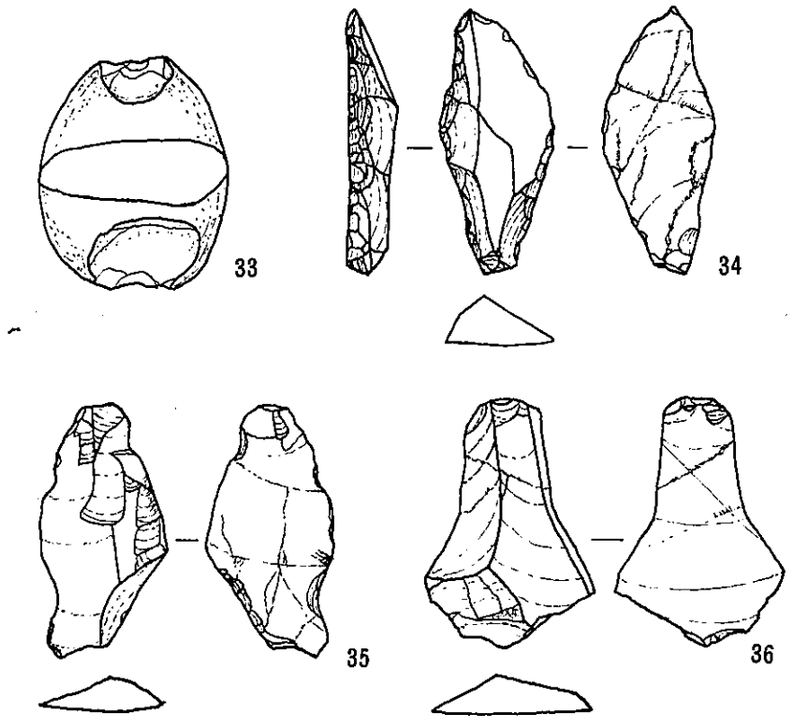
遺物　12号墳の東側周溝トレンチの黒色土中より土師片が少量出土しているだけである。

小結　本墳は径が５ｍにも満たない、当古墳群中、最小規模の古墳であり、築造時期を推定する手懸りになる遺物は何もない。たゞ、５号墳の項でも述べたように、５号墳南側周溝でも南西隅よりの周溝外掘り方のカーブが本墳周溝のカーブと軌を同じくし、それが12号墳の存在によって生じたものと解釈すれば、本墳の築造時期は５号墳に先行するか、もしくは同時と考えることが出来よう。しかし、５号墳西側周溝の外掘り方も内彎しているので即断は出来ない。５号墳西側周溝の内彎のカーブが４号墳の存在によって生じたことが将来の調査によって証明されれば、上記の推定は正しいと言える。残念ながら、今回の調査ではそこまで追求できなかった。　（宮坂信廣）

(7)　古墳時代以前の遺物

古墳時代以前の遺物として、弥生時代後期土器片と石器がある。前者は６・８号墳の周溝より１片づつ出土したのみであなので、ここでは石器について見ておきたい。

打製石錘(33)：扁平な礫を素材とし、両端に打ち欠きを入れた比較的大きな石錘。８号墳南西部での表採品。重さ 104ｇ。砂岩製。



第18図　出土石器実測図（33：½、34～36：実大）

ナイフ形石器(34)：縦長剥片を素材とし、左側縁に丹念に刃潰し加工を施し右側縁の下半にも二次加工がみられ基部としている。先端はやや尖り、一次剥離面の鋭さを生かした刃部には使用痕跡がみられる。１号墳北側の周溝中より出土。

小剥離痕のあるフレイク（35・36）：出土したフレイクの中では縦長の、割合に形のよいフレイク。35の周縁には使用痕を示すのか、小剥離痕が残り、36の打面の反対側先端部にも小剥離痕がある。35は１号墳の褐色土中、36は12号墳の表土層より出土。

以上の三点は、すべてチャート製で打面およびバルブがみられる。この他、自然面を１部に残した粗雑なフレイクが１号墳２片、８号墳１片、12号墳１片、計４片出土した。分散的な出土状態からみて、近いところにもつと遺物の集中したいわゆるブロックがあるのかもしれない。

伊勢の場合も、約40ケ所のナイフ形石器出土遺跡の多くが、本古墳群例のように、低地に面する台地端部に目立つ。この点、おそらく当時の食糧源をねらいとする遺跡立地を示すものであろうが、海水面変動による旧景観、動植物相の変化などの問題もあわせて今後の重要な課題であろう。ただ、直線距離にして南へ２㎞の距離にナイフ形石器の散布量がすでに 100点をこす大規模なカリコ遺跡があり、新池東、西両地点や断片的な剥片だけの散布地という小遺跡の存在とからめて、遺跡自体の性格的な相違が考えられる。（奥 義次）

Ⅳ　総　　括

1、本古墳群は、洪積台地縁辺の舌状台地に形成された12基からなる古墳群である。うち半数の6基に調査の手を加えた。未調査古墳も含めて、その概要をまとめたのが別表である。古墳規模は径（全長）15mを越えるもの2基、10mクラスのもの2基、7～9mのもの7基、5m以下のもの1基という内訳になり、大半が10m以下の小規模な古墳からなる古墳群である。たゞ、その中で11号墳のみ規模が傑出しているのが目につく。このように古墳規模の上からも、本古墳群は11号墳を主墳格とした古墳群であるという印象を強くうける。

2、調査した古墳はすべて周溝を有していた。未調査古墳でも4・7号墳に周溝のめぐることは6・12号墳調査の際確認している。また、11号墳も現状で周溝がめぐることが歴然としており、3号墳もその痕跡が現に表われていて、すべての古墳が周溝を有していると考えてよい。周溝の調査を実施した古墳5基についてみると、周溝の掘り方幅はいずれも1m内外でほぼ断面がU字を呈しているものの、方形にしろ、円形にしろ周溝に曲折があって、深さ、掘り方幅とも、同一古墳でも一定しない。

3、1・5・6・9号墳の周溝中からは須恵器杯・高杯・壺・瓶・甕類、土師器杯・甕が検出された。いずれも完形で検出されたものはなく、壺・甕・瓶類は破片で周溝内に集中して散乱している状態であり、5号墳では周溝の掘り方付近から瓶の破片が検出されたりして、いずれもが周溝ベースより遊離していた。周辺で周溝をもつ古墳の場合、必ずといってよいほど溝中より須恵器、土師器の類が出土するがいずれもベースより遊離しているのが一般的である。今回の出土状況も例外でなかったわけで、墳丘に置かれたものが溝中に落ち込んだとも理解出来るが、それにしては墳丘表面に須恵器、土師器の破片が一片たりとも検出されなかった以上、溝中に置かれた遺物と理解するのが自然であろう。しかも、1号墳の場合、主体部より出土した土師器高杯と周溝出土のそれは全く同巧であり、6・9号墳の場合も主体部遺物と周溝遺物に明らかな相違を認めがたいところより、周溝に置かれた遺物は、埋葬時もしくは埋葬時から時期的なへだたりを認めがたい時のものである。したがって、このことは、古墳に死者を埋葬する際、飲食容器等の日常雑器を供献する葬送儀礼が本古墳群の場合とり行なわれたことを物語るものであって、その器物の供献が周溝でなされたと言えよう。

墳名	外形	規模 径	規模 高さ	内部主体	主体部遺跡	周溝遺物	築造時期	備考
①	円	8.8× 9.0	1.0	木棺直葬	須恵器提瓶・短頸壺・杯蓋、土師器・高杯、刀子	須恵器杯身・杯蓋 土師器高杯3	7世紀初	全面調査
2	円?	6.0× 8.0	0.45	—	—	—	—	保存
3	円	10.0×11.0	1.0	—	—	—	—	〃
4	円?	7.5× 8.0	0.45	—	—	—	—	〃
⑤	方	5.75× 8.2	1.3	—	—	須恵器杯蓋・直口壺 横瓶2、土師器杯	7世紀初	周溝のみ調査、保存
⑥	〃	8.5×10	111~1.3	木棺直葬	須恵器・短頸壺	須恵器杯蓋2・高杯 土師器甕・杯	7世紀初	全面調査
7	前方後円	全長15.0、後内部径10.5、前方部巾7.5	1.1	—	—	—	—	宅造工事により半壊 保存
⑧	円	10×11	1.4~1.5	—	—	灰釉陶器片	?	周溝のみ調査, 保存
⑨	〃	7.0	0.77	木棺直葬2	第1主体 須恵器杯セット 第2主体 須恵器杯セット・直口壺	須恵器広口壺・甕	7世紀初	主体部・周溝調査 保存
10	円	9.0× 9.5	0.7	—	—	—	—	宅造工事により全壊 未調査
11	円	16.0×16.5	2.05	—	—	—	—	宅造工事により⅓壊
⑫	円	4.5	0.6	—	—	—	—	周溝確認調査、保存

明星古墳群調査概況表（○囲い：調査古墳）

4、1号墳では主体部が明瞭に検出されなかったが、それでも旧表土上に埋葬主体が置かれたことは明らかであった。それに反し、6号墳は旧表土上にある程度盛り土を行なった上に埋葬主体を置いていた。いずれにも墓坑はない。墳丘のたち割りを行なったのはこの2基のみで、他についての詳細は不明であるが、高さ1m内外の古墳では墓坑を掘らず、直接に埋葬主体を旧表土上におくか、あるいは一時盛り土をした上で埋葬主体をおくかしたと考えられる。したがって墳丘の盛土も1・6号墳では60cm以下と薄く、埋葬主体を被覆する程度のもので、周溝を掘ってその盛土に充てている。後期古墳でも、木棺直葬の際は墓坑を掘り、それに埋葬主体を納めるのが通例であって、それにはあらかじめ墳丘を盛り上げ整えて置くことが必要であった。しかし、本古墳群を調査したかぎり、周溝の曲折に見るように墳丘造営の計画性はなく、埋葬にのぞんで始めて墳丘を盛り上げて形成された、貧相な感じがいなめない古墳群である。たゞ、11号墳だけは一般的な後期古墳の規模を有し、他を圧している。

5、貧相な墳丘と相まって主体部の副葬品も貧弱である。鏃、直刀といった武器類、装身具類は全くなく、日常の飲食容器である杯・壺、瓶類が僅かに副葬されているのみで、6号墳に至っては1点のみの副葬である。本古墳群と同じ頃、調査された多気郡多気町河

田古墳群も副葬品から見て明星古墳群と大差ない時期の古墳群であるが、その副葬品の数を比較すれば明星古墳群の劣勢はおおうべくもない。

6、12号墳を除いて調査古墳からは、点数の多少はあれ、いずれからも須恵器が出土しているが、出土須恵器間に著しい手法の相違は見当らず、杯類に見るように器形が近似していて同一型式の須恵器と見なすことができよう。今、これら須恵器を陶邑古窯址群の須恵器の編年体系に照らせば、宝珠つまみ出現直前のTK209型式に比定できる。このことから、調査古墳は7世紀初頭に相ついで営造されたと推定され、その先後関係は明らかでない。未調査古墳については出土遺物も皆無であるため、営造時期の推定は困難であるが、調査古墳ともども、狭い舌状台地に隣り合って立地している状態からして、7世紀初頭の同時期に営造されたと理解するのが自然であろう。このように、本古墳群は11号墳を主墳格として7世紀初頭に形成された古墳群と推定される。

7、1～2基のみ古墳規模が傑出して、他の径が10m以下の古墳からなるような古墳群は周辺地域にも所在する。多気町東池上女山古墳群（5基）、伊勢市佐八町藤波古墳群（9基）、同栗野町まこも古墳群（8基）、玉城町蚊野ぼうず山A古墳群（12基）、同町勝田八柱神社古墳群（5基）、同町中楽豆塚古墳群（4基）などがそれであり、いずれも台地状の狭い範囲に集中分布している古墳群である。古墳規模が小さいため、自然地形の起伏と見なされがちであり、精査をすればこのような古墳群は現在以上に周辺で確認される可能性がある。これら古墳群は、南勢地域最大の古墳分布地域―櫛田川流域の丘陵及び台地周辺に立地している場合が多い。調査の手を加えたのは女山古墳群第4号墳のみであり、4号墳は本古墳群より一時期遅い7世紀中頃のものと推定される。いずれにしてもこれら古墳群の主墳格を調査した実例はない。群を形成する個々の古墳の分布の状態からしてそれぞれの古墳群がある一時に形成された可能性が強い。本古墳群もこれら古墳群のグループに入るものであって、本古墳群のような古墳相互のあり方は、そのまま、個々の被葬者が生活基盤とした共同体のあり方を反映したものであり、共同体内で占める被葬者の地位が主墳格と小規模古墳を生んだ背景と考えられ、家父長制的な共同体秩序をその根底に考えたい。したがって、11号墳の被葬者は家父長制的な共同体を統率するリーダーであり、他の小規模古墳はそのリーダーに従う共同体の構成員と理解できないであろうか。この点については、同様な古墳群の解明を通じて今後検討していかなければならない問題である。

8、本古墳群から西に離れた櫛田川流域の丘陵上及びそれに続く台地上には、5世紀に早くも古墳が営造され出し、6世紀後半から、7世紀前半にかけて爆発的に営まれた実態

の一端が最近の河田古墳群の調査で明らかにされ、古墳総数は優に 300基を越えると推定される。それに比べて明星台地には本古墳群とぼた塚古墳群が分布するのみで、第1図に明らかなように、前者の地域の古墳分布に及ぶべくもない。古墳の営造が農耕生産の発展から生じる生産力の剰余に基づくものであるかぎり、多数の古墳を営造している櫛田川流域は、それをつくり出すだけの経済的な余力を蓄積することが可能な地域であった。「倭名類聚抄」に見える、兄国・多気・有弐・湯田郷は、現在の多気町兄国・多気町竹川・同町有爾中・玉城町湯田に比定され、この郷名をつなぐ輪の中に櫛田川流域の大半の古墳は包摂される。そしてこれら古代の郷が所在した地域周辺には条里制遺構がひろがり、生産基盤の広さを想像させる。それに反し、明星古墳群の所在する明星台地周辺には、半湿田が台地間に広がり、今でこそ低台地の山林を伐開して開田しているが、古墳時代においては生産基盤を湿潤な台地間低地に求めたと考えられる。前者に比して著しい生産基盤の狭小性は、立地からして洪水の危険はないにしても、旱魃等の災害は起り得たであろうし、生産基盤の狭小性故に安定的な再生産が困難であったのではなかろうか。このことが7世紀になって始めて貧弱な古墳群を生み出した基本的な要因であったろう。反面、被葬者たちにとっては、やっと7世紀に入って貧弱な古墳であっても、それを自分たちの手で造り出すだけの経済的な余力を生みだしたことに他ならない。しかし、7世紀初頭の一時期のみで、その後に古墳は明星台地には営まれることはなかったし、多くの古墳を生み出した前記の地域でも7世紀中頃を過ぎるとばったりと古墳は造られなくなり、終息する。そこに、われわれは大化の改新を契機として、公地公民の旗をかかげて国家が直接に人民を把握し、やっと古墳を造り出し得るようになったささやかな経済的な余力までをも収奪していく律令体制の大きな足音を聞く思いがする。　（奥　義次・下村登良男）

〈注〉　河田古墳群は帯状に延びる丘陵の尾根及び中腹に累々と造られた古墳群で、現在判明しているだけでも60基をこえる。土取りに伴って昭和48年に7基、昭和49年に16基を調査した。出土土器は 500点余を数え、調査者は6世紀後半から7世紀前半にかけて営造された古墳と考えている。報告書は近く刊行される予定。

参　考　文　献

土地条件図「松阪」「伊勢」図幅　　国土地理院
「中南勢 開発地域遺跡地図」三重県教育委員会　1971
近藤義郎「日本古墳文化」日本歴史講座第1巻　1957

田辺昭一「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園研究論集10　1966
服部貞蔵「三重県史、原始古代篇」三重県　1964

図　　版